

カイバル峠に日は暮れて

森本たけし

(アフガニスタンよりインドへ)

カブールへの道

カブールの南、カンダハルからオンボロバスに身を任すこと十時間余。アフガニスタン

の首都カブールに着いたのは夕闇が市内を包みはじめようとしている時だった。街の中心を横切って流れているカブール川の流れの音もなにかしらけだるいリズムを奏でていた。

バスが停留所に止まるや否や、たくさんの荷降りし人夫（彼らほたいがいモンゴル系。モンゴル系の地位はここでは低い）それから、手に手にホテルのパンフレットを持ったポン引き風男たちがどっと我々異国人のまわりに集まりワイワイ、ガヤガヤ……服のそでをひっぱったりうるさいったらありやしない。さながら馬の糞に群らがったハエの如き按配。カンダハルでバスに乗り込んだのが朝の七時。我々にとっては朝七時前に起床というのは相当つらい。現地の人たちは、わりと早起きで喫茶店（日本的なそれでは断じてない。きたない土間みたいな処にすわり込んで紅茶を飲む。夜はランプが唯一の灯り）はもう営業をはじめていた。

車内を見回すと、ターバンを巻いた現地人以外に、居るぞ、居るぞ、スウェーデン人、ドイツ人、イギリス人、カナダ人、オーストリア人がすでに座席に腰を落ちつけていた。



我々日本人も加わり国際色豊かだ。みんな同世代のインドへと向かうヒッチハイカーだ。カンダハルは南に位置しているせいか生暖かく妙に官能的で、そしてハエが多く肌寒いヘラートとはダン違いだ。ハエという昆虫がブンブン飛びかい手や目に止まるだけで、それだけで不潔感を倍増させる。まさにハエは不潔のシンボルと言えようか。アフリカのカスバやサハラ砂漠を旅行している時も、ハエの攻撃に会い夜中ずっと寝られなかったこともあった。

運ちゃんもドカッとふんぞりかえって運転席に腰をおろしている。車掌がみんなの座席を確認してバスは出発進行。ブルルンルン、快調なエンジンの音が空にこだまする様だ。これでまた少し日本へ近くなると思うとうれしくなってくる。

相変らずバスの中は、ハエが鳥籠から解放された鳥の如くブンブン飛んで来ては、顔や顔、手に接近してくる。本当にしつこい。

アフガニスタンは山岳ならびに砂漠地帯なので汽車は全然走っていない。主要交通機関はすべてバスそして車だ。

首都カブールはカンダハルからバスで十時間余北上した処に位置している。カブールに向かうにつれだんだん肌がひんやりしてきた。四時間も走ったであろうか、雪が見えるじやありませんか!!ビックリしたね。アメリカとソ連が競って造った道路の両側には雪が点々と存在し、遠くの山の頂はまだ雪帽子をかぶっている。

カンダハルでは、生暖かく気持ち悪かったのにまだここでは雪が見られる。差がひどすぎるな。ここアフガニスタンでは「ハエ」と「雪」とが矛盾することなく存在しているんだ。日本じやちよつと見られない光景だなと変なところで感心した次第。ロンドンから一諸に旅行しているパートナーの石川の方をちらっと見たら小さな手帳に大きな字で「雪とハエ」と書いていた。

アフガニスタンではもう一回おもしろいことがあった。ヘラートからカンダハルに向かう途中、バスはもうもうと砂塵をあげて砂漠を走りはじめた。まきあげる砂は破れた窓ガラスからバスの中に侵入してくるし、おまけに我々乗客の口の中にまで凶々しく飛び込んでくる。石川と、どうしようもないと言っているうちに、バスはガクンと不意打ちをくらった様に急停車したので、一体何が起ったんやろ?馬賊の襲撃かな?と不安な影がぼくの脳裡をかすめた。不安げに成行に注目していると、数人のターバンを巻いたオッサン連がバタバタと砂漠に向かって駆けはじめた。イチ、ニ、サン、……占めて九人。そのなかで、ひげをはやした一見して村の長老格風のじいさんが号札をかけ残る八人を坐らせた。彼らは大きな風呂敷みたいな布にピョコンと坐った。長老格はと言えば、何やらブツブツ呪文らしき言葉を発し、今やまさに沈まんとする神秘的かつ聖なる太陽に向かって敬虔なるお祈りをしはじめた。残る八人の男がそれに倣う。頭の上に両手を上げしておもむろに地面に降ろしおでこを何回も地面にこすりつける様にして太陽を拜むのである。

頭を地面に下げる度に、またない布を巻いたグロテスクなおしりが上ったり下ったりして滑稽度百パーセント。ぼくはバスの窓からその儀式を見ていた。二十分もたったのであるか、彼らは一日の重要なつとめであるおいのりを終え服についた砂を払いながらガヤガヤとバスに戻ってきた。出発進行ノバスは何事もなかった様に一路砂けむりを天高くまきあげ走り去った。バスの後方をみると、らくだがだんだんとちいさな点に変化していくのがぼくの目に映った。

北アフリカ、中近東を旅して感じる事は、彼らの日常生活とイスラム教（回教）との結びつきが非常に堅固で西欧社会におけるキリスト教の比ではない。インドへ入るまで、何回もアラアの神への祈りを見た。夕日に映える荒々しい砂漠でのお祈りには、「異教徒」のぼくにあって、なんとなく荘重さの中の滑稽さみたいなものが感じられた。

さて、話をカブールに戻すと、まずホテルを決め、所帯道具一式が入っている十二キロのリュックを部屋にほうり込み、何はなくとも腹ごしらえしてないことを石川と言いながら、かの有名なカイバール・レストランへと足を運んだ。アフガニスタンには不釣り合いなりっぱなビル。ここまで場末の安宿、安食堂ばかりに首を出してきた我々にとってこのレストランは、豪華絢爛すぎた。ほんまに、ここがヒッチハイカーの間で有名なカイバール・レストランやろな思いう一回再確認のため一見紳士風のおじさんに聞いてみた。まごう方なきことは真正正銘のカイバール・レストランよ。よっしやノ今日こそは腹一杯

ブルジュワになったつもりで腹が裂けるまで食うぞ、ウシシシ。

中に入っていくと、バシッとネクタイをつけている紳士がいるかと思えば、我々と同類項のGパンにジャンパーといういでたちのヒッチハイカーが居る居る。

ここはおもしろい処で、ドアをおもむろに開けて入った所は普通のレストランで蝶ネクタイに白制服のボーイが注文をとりに来る。しかし、もうちょっと奥へ入ってみよう。そこは、セルフサービスになっていて、ちょうど大学の食堂といった按配。大きなお盆を持って、手で現物を指さし、最後にレジでガチャンと合計××アフガニーとうってもらわだけだ。

冷たい水が飲みほうだいだし、清潔この上もないし腹一杯食ったところで六〇〜七〇アフガニー（二五〇〜三〇〇円）。不足していた生野菜を久かたぶりに食った。魚のフライも食った。ギリシャを発ってからゲテモノばかり食わされていたぼくの胃腸が活気づき、次から次へと皿をたいらげた。久しぶりに満足感を十二分に味わった。

我々が夕食を食べ終わったら、ボーイが皿を片づけに来た。我々一同がそのボーイの顔を見るやプーとふきだした。それもそのはず、以前小学生から大学生の間で人気のあった「天才バカボン」の親父にそっくりだったからだ。ちょびひげをはやし、蝶ネクタイを若干よごれたYシャツに仰々しく結びつけ時々ニヤツと笑う。フニキがそっくりだった。現在、写真を撮ってこなかったのが非常に悔やまれる。これから、アフガニスタンへ行く

人の中でもとりわけ物好きなお方は彼の写真を撮ってきて下さい。おねがいします。

他にカブールでは、パキスタン大使館のななめ前に、これまたすぐ美味しいメシを食わしてくれるマルコポーロというレストランがあることも付け加えておこう。

時は二月十六日。石川とホテルの前から、かつこよく「ヘイノタクシ」てな調子でタクシ―に乗り込み——実を言えば、ヨーロッパでタクシ―に乗ったのはほんの数えるほど。歩けノ歩けノが我々のモットだった。何を隠そうゼニがなかったから——運ちゃんに「日本大使館までたのむ。」と英語とフランス語で言ったのだけど皆目通じない。すると、運ちゃんスタスタと車を降りて向こうから歩いて来たインテリ風にいちゃんにしつこく聞いている。運ちゃんがにやつと白い歯を出して笑った。わかったらしい。「オッケー」と運ちゃんは一つしか知らぬ英語を満面に微笑を浮かべて、得意げに使った。

さあ、日本大使館でポン友から来た手紙となつかしい日本の新聞が読めるぞ、うれしいなとぼくの心の中は可愛い天使のはしゃぐ声で充滿していた。「おやじ、もうすこしスピードをあげよう。」と日本語で言ってみたところで馬の耳に念仏ならぬアフガン人に日本語とくらあ。相変らずボロタクシ―はプスンと調子の悪い音を出して走っている。十分ぐらい走ったら、運ちゃんが「ハンサムな日本の兄ちゃん（あくまでも推測の域を出ないけど）、着いたよ。」と水ばなをすすりながら言うので二十アフガニーを払い意気揚

揚と大使館へ行ってみた。表札が目飛び込んできた。そばまで行って確認してみると、ありやあノインド大使館じゃないかノぼくはすぐにタクシ―のところへ戻ってみたら、石川は怒りその極に達しており運ちゃんにゼニを返せと浪花男らしく息巻いている。ぼくもガタガタ文句を言っているうち、ちらつと大使館の方へ目をやると、暗雲たちこめたロンドンでのグループだったI君、K君、Y君たちが大使館から出てきたところだった。感激で立ちくらみがして一瞬、石川とぼくの体は汗ならぬ涙でびしょびしょになるほどだった。お互いにガッチリと堅い握手をしてお互いの無事を喜びあった。彼らは我々がロンドンを発ってから急に我々を追っかけたくなり、中近東の情報を急ピッチで集め猛スピードで我々を追いかけて来たらしい。

奴らの第一声。

「おまえら、まだこの辺をうろついているんか？ ゆっくりやなあ、何しとったんや。デリーあたりで会うと思っていたぜ。」

こちらは答えて曰く。

「こちらは優雅にかつ気楽にやっとなるんじや。飛行機で帰ると言ってはばからなかった奴がよくカブールくんだりまで来たな。疲れた面していないな。よっしやノ腹へったからメシを食いに行こう。」

みんなでとこるかまわず大声で笑い、そして行きつけのカイバール・レストランで再会



カンダハルの町で

の乾杯を「水」でやった。なつかしかった。うれしかった。結局日本大使館へは翌日行った。

後日談。

彼らと会ったのはお昼をすぎた一時頃。ピザタイムは十二時で終ってしまっていた。そして翌日（水曜日）インドのピザを申請して、「明日昼までに取りに來い。」と言われていたのをころっと忘れていて、おそるおそるインド大使館へ行ったのが一時半。職員は冷たく「ピザタイムはもう終わった。」と言いつつ放った。しかたがないので、書記官の官舎へ電話をかけたが、おこられるためにかけた様なものだった。翌日金曜日は、回教圏では休日。またもやピザを取れず。やっとこさピザを我々の手中にしたのは土曜日の朝だった。

回教圏を旅行する人は、ここでは金曜日が休日だということをはっきりと銘記しておいて下さい。

海外旅行をした者なら「世界は狭い」という言葉を実感を持って語ることが出来る。しかもスペインで高校時代の友人の友人に会ったり、北欧やギリシャで会った連中にロンドンやマドリッドでばったり再会したり……………ヒッチハイカー同士の口コミの伝達はロケットの如くすごいスピードで全ヨーロッパを翔る。

たとえば次の様になる。

「よおノタキ（ぼくの愛称）、元気か？お主と会ったのはどこだったけ？あノそうか、アテネだったな。そうそう、のみの市」で我々が店を出し、あかのついたシャツ、くつした、パンツなどを売ったな。なつかしい、なつかしい。

ところで、あの時、一緒に商売したA君のくわしい消息わかる？俺、奴の住所を知りたいんだ。風のたよりで聞きゃあ、今、ストックホルムで皿洗いをやってるそうだけ。奴、根性あるもんな。そして、稼ぎ次第アメリカに渡り中南米、南米へと降りるそうだ。文字通りの世界一周をやるそうだ……………てな調子。

異国の空の下、一緒の船で来た連中、どっかのユースホステルで会ったヒッチハイカー

や一緒に暑い暑い太陽を背にうけながらヒッチをトライした連中に再び会うと感激で臉の裏がピクピクして来る。すごいいいもんだ。

これから外国へ行く諸君ノ一発、外国で悪いことをやらかそうなどと変な気をおこさないこと。常に目が光っているぞ!!

カイバル峠に日は暮れて

アフガニスタンのパキスタン寄りの街、
ジェララバッドで一泊した。この街の周辺は土

が肥えているせいか羽振りがいい様だ。おまけに太陽もサンサンと金の糸を地面に投げかけるし、街行く人の顔にも何か落ちついた余裕みtainなものが感じられる。

街を歩いていて大笑いしたことは、車もあまり通らぬ、しかもおまわりさんが交通整理をしている交差点で自転車同士が正面衝突。それぐらいの街だからのんびりかげんが推測できよう。

それからこの街には、小股の切れあがった可愛い子ちゃんがかっこう居るなってこと。例の旅行者にとっての悪しき対象チャドリという黒い布ですっぽり包んでいるうら若き女性が少ないのだ。年増女たちはしっくも従来 of 回教の掟に従って黒装束、黒覆面で顔を隠しているけど……。



アフガニスタン人

話は前後するが、

カブールからジェララバッドへ行く途中、我々の乗っていたミニバスがエンジンの音も軽やかに、あたかも青空に音を反射させるかの如くスイスイと谷川のそばのくにやくにやした道を走っていた。

我々のバスが、一直線道路へ出た時、うしろからエンジンの音も鈍く、地獄でわめきちらす鬼たちの不平不満が反響している様なうなり声を発し一台のポロポロのタンクローリー車が追いぬきをかけて来た。競輪用語で「まくり」というやつだ。あれよ、あれよという間にぬかれてしまった。……と思いきや、我々の車の前八十メートルのカーブでうまくまがれず山側にある荒地へもうもうと砂煙をあげて横転。ちようど亀が腹を天にしてひっくり返った按配だ。

もし、こっちの車もスピードを出して執拗に追いかけて衝突したら、むちうち症どころの騒ぎじゃなく、あの世行きってなことになるかねなかった。くわばら、くわばらと胸をなでおろした。冷汗がGパンのすみずみまでベットリとついている。

我々の乗っているミニバスは、すぐに現場の前を通ったけど、亀の様にひっくり返っているタンクローリーに、知らぬ顔の半平衛でな感じで、チラッと一ベツを与えただけ。車も止めるなんて気配はみじんも感じられなかった。このへんのところ、我々日本人には理解しがたいところだ。他分、かわいそうに、タンクローリーの運ちゃんは、あの世へと

昇天した様だった。

いよいよ、アフガニスタンともお別れです。アフガニスタンの国境を通過しパキスタンへと向かった。パキスタン側に入ると、税関のすぐ前で、ここも、やみ両替屋が横行し、「マニー・チェンジ」としっこい。

ここ、カイバール峠の入口の、国境周辺には雑貨屋があり、ビスケット、コーラーと並んで鈍く黒光りするチェコ製のガンが置かれてあったりする。はじめ見た時は、「おもちゃだと思って、店のおっちゃんに、「ちよつと見せてくれや。」と言ひ、それを渡してもらった時、手に感じた重量感。ああ、これは本モノだなと思いつつ、「おっちゃん、これいくら？」と問うと、「十五ドル」という答えがはね返ってきた。日本へのみやげにどうだとは、決して言わなかったけどね……。

アフガニスタンでも、街のど真中を、種ヶ島銃みたいなのを二丁かついで歩いているに「ちゃんが我々を呼び止め、「これ、買わないか？安くしとくぜ。」と我々に銃を見せてくれた。これも本モノで、タマさえこめりゃあ人殺しができるというブッソーなものだった。アフガニスタンにしろパキスタンにしろ、この辺の緊迫した政治情勢を物語っているだろう。

ここの税関も、御多分にもれず麻薬に対してはすごく厳しい。デリーで会った日本人に聞くとここによれば、彼と同じおんぼろバス、しかも隣の席に坐っていたデンマーク人

がハッシッシヤらマリファナを服のうらに縫い込んでいたのがバレテしまい、それから、バスの乗客全員の荷物を徹底的に検査。そのデンマーク人はパキスタンの言語に絶するほど汚ないであろうと推測される牢屋で七年から十年の刑を受けることになったそうである。淀川長治風に言うと、何ともこわあーいお話です、というところかな。

バスは、いよいよカイバール峠の入口にさしかかった。

カイバール峠は、標高千百メートルのくねくね坂で、紀元前二千年にアリア人が、ここを越えて、サンスクリット文字をインドへ伝えたし、紀元前にアレキサンダーの遠征軍（アレキサンダー大王は北の方から迂回してインドに入った）もここを通った。十三世紀には、デンギスハンの軍勢がこのカイバール峠を通った。十八世紀に入ると、三回のアフガン戦争が起こった。イギリス軍は、このそりたつ地形を利用したアフガニスタン軍の攻撃にあい、一人を除いて、文字通りの完敗に終わった。

過去、この峠を、武器を持って、またある時は貿易のため通過した人は数えきれないだろう。仏教もここを通って伝えられたと言われているし、ギリシャ文化の影響を強くうけたガンダーラ美術もこの峠周辺や、アフガニスタンには残っている。

詰まるところ、カイバール峠は、通過の困難性、地形的云々というよりも、その歴史的事実の重さにより、世界にその名を知らしめたのだろう。

九十九折の山道をバスの運ちゃんは、ここぞ腕の見せどころとばかりビュンビュン、ス

ピードアップを試みる。遠い昔のまた昔、隊商はこの峠を何日もかけ、苦勞の末やっと越えたことだろう。

峠を越えている最中、下から大きなトラックやバスがゼイゼイとうめきながら登って来たのに出会うと、一瞬ひやりとする。

しかし、実際、ここに来るまでカイバール峠はすごい処だと聞いていたけど、想像したほどたいしたことはなかった様に思う。

インドからネパールへ行く時の山道、北アフリカを東西に走っているアトラス山脈越えの方が、峠を越える時間そしてその峠の高さという点でスリル満点だった。背筋がぞっと冷たくなることこの上もなしだ。インドからネパールへ行く途中、谷に落ちこんだフォールクワーゲン、バス、トラックの残骸が痛々しく見え、その上に草が茂り春風がそっと吹いている。バスに乗る前、ネパール人がこう忠告してくれた。

「カトマンズへ行くのかね。それならなるべくいいバスに乗りなさいよ。先日バスが谷底に落ちこんだのでねえ……。」

ネパールへの山道、アトラス山脈越え、そしてここカイバール峠といい、安全性の保障はあまりないのだからスリルがあるのも当然と言える。

ぼくの成績みたいに上ったと思えばまた下るカイバール峠も無事越えました。ペシャワールまで同じ様なオンボロバス。ペシャワールでは、汽車の出発まで馬車で街

を一周。

その夜十時発の汽車でラホールへと向かった。駅やホームは大きな荷物をもったパキスタン人で一杯だ。パキスタンもインドと同様学割がきく国である。まず、コンセッションオフイスで、私は日本の学生で、あなたの国の歴史や地理に大変興味を持っています。この国を旅行していろいろ勉強したいと思っています。それ故、学割の交付をお願いしている次第であります。てなことを書いて（もちろん、英語で）申請すればかなりの額が割引かれる。（多分、半額になったと思う。）

ラホールに翌日の正午に着き、インドへ行くための道路通行許可証ロードパーミッジョン（ビザみたいなもの。）を取りにホームデパートメントへ行った。これはビザと言ってもインド側のそれじゃなくあくまでもパキスタン側のパーミッションだ。

三時にインド、パキスタンの国境は閉じてしまうと聞いていたので若干あせった。

うまく、国境行のバスに乗ることができた。バスは、のんびりした、子供が棒を持ってにわとりや水牛を追っかけまわしている田舎を通りすぎる。砂漠みたいな処も通った。砂がもうもうと舞いあがる。悪いことに、バスの窓はしっかりとしまらないから車中も砂がもうもう、頭、顔が砂っぼく口の中もぎらぎらすることこの上も無い。

二時間後に、やっとこさ国境にたどり着き、まずピンがほこりで白くなっているコーラでのどをうるおした。のどが生き返った様だ。それから、残ったパキスタンのお金を全

部ここで使ってしまったおうと、ハエが手をすり足をすつる汚ないクッキーを買って腹におさめた。いよいよ、もうすぐ当面の目標であるインドである。五十メートル先がインドなのだ。

まず、パキスタン税関で出国手続をしようとしたら、税関のおやじが「万年筆を持ってるかかい？ 今、書くものがないので貸してくれないか。」とのたもうたので、「オッケー」と言いながら中国製万年筆を貸してやった。彼はぼくのペンを使ってスイスイと台帳にいろいろ書いている。

書き終えた様なので、「おっちゃん、返してくれや。」と言っても知らんふりして、我々の後に並んでいたイギリス人の出国手続の諸々のことを台帳に書き入れている。

「おっちゃん、早く返してくれよ。」と再度言ったら、このおやじは何と答えたと思う？ 次の様に涼しい顔でおっしゃった。

「おまえと会った記念にこの万年筆をくれないかい。」

一国の税関で働いている連中がこんなことを平気で言うのだから聞いてあきれる。

あわてて、万年筆をとり返し、無事それははぼくのポケットにおさめられ国境の遮断機を渡りインドに入った。我々がカブールに居た時、パキスタン人がインドの飛行機をハイジャックし、両国の政府が折衝中にパキスタン側がそれを爆破してしまっていたので、ますます両国のミゾは深まるばかり、そういう事件も反映してか、この国境は他の国境と

違い、陰険な雰囲気がやはり漂っていた。

インドの税関吏は五十がらみのおぼさんで、やさしい人だったけど、時おり、きりっと鋭い目をこちらに向けた。

にこにこ笑いながら、壁の方を指さし、その表示を読んだかと言う。壁の表示を見てもると次の様に書かれていた。

次の物は持ち込み禁止。

ハッシッシ、マリファナ、ガン、……etc

「そういう物を持っていないでしょうね？」とおぼさん。

我々はいっせいに首を振り「持ってません。」次なる質問は、「カメラ、ラジオを持ってますか？」「イエス。」では見せて下さい。我々はカメラを机の上に仰々しく並べると、「この小さいなカメラはいくらの品物ですか？」「四十ドルです。」ともったいぶって答えると彼女は鉛筆をなめなめ、ほしそうな眼付で台帳に記入している。書き終ったら、それをいじくりまわしている。

このおぼちゃんはカメラ、ラジオのファンで日本人と見るや、「カメラやラジオを持ってますか？」としつこく聞き、値段が手頃だったら売ってくれとせがむ、とインドを通過してアフガニスタンで会った日本人から聞いていたところだ。

やっぱり聞いたとおりだ。しかし、パキスタンの税関吏ほど腹黒くなかったから別に悪

い感じはしなかった。

我々日本人の目から見れば、彼らの言動は理解に苦しむ。けれども、中近東、アフリカでは、こういうことや、ワイロを渡すなんてのは日常的なものなのだ。

デリーへデリーへとタキちゃんはなびく



インド国境を出た処から、これまた汚ない
ポロバスでフェロゼポールまで。夕闇がすで

に支配していた。電灯が少ないせいか黒一色で塗りがためられている感じである。

バスはその夕闇のなかをブルンブルンと走りぬける。夕闇の向こうで人が動いている。

バスが市場みたいな処へ入っていった。子供を背おった女、泣きじゃくっている子供、こじき……が道路にところ狭しとあふれている。バスのクラクションの音は鋭い。ああ、そろそろインドへ来たなという実感がヒタヒタと押し寄せてくる。

フェロゼポール駅前にバスは着いた。わっと人が集って来る。こじきが多い。バクシー（金をくれ！）と子供、こじきがまつわりついて来るし、聖なる動物と言われている牛がところかまわずのっそりと、尊厳”を持って歩いている。

多くの人が、疲労感という水に首までどっぷりとつかり、にごった空虚な眼を空に向け
ている姿は痛々しい。

アフガニスタン側のパキスタン国境で、国境警備兵は「おまえ達、これからインドくん
んだりまで行くのか？」と話しかけてきたので、「うんそうだよ」と答えたら、「インドは
非常にまずい国だ、ノー、グッドな国だ。」なんて自分の国のまずさを棚にあげてぬけ
ぬけとのたもうた。第三者の目から見れば五十歩百歩。

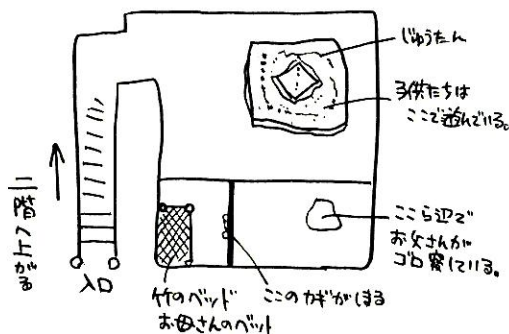
今度はインドで、「パキスタンはまずしかったらう？」と何回もたずねられた。この種の
質問にはあほらしくていちいち答えられぬ。

デリー行きの夜行列車が重い足を引きずっているかの如くジリジリと入って来た。決し
てすべり込んで来るという感じではない。汽車がホームに止まるや否や、駅はさながら戦
場と化する。人があっちへ行ったりこっちへ来たり、蟻の行列みたいなものだ。彼らは、
驚嘆とも叫びともつかぬ奇声を張りあげ、駅全体にこだまするかの様だ。

それから、ホームで待っていた連中は目をぎらつかせ、中に居る乗客が降りる前から力
ずくで中に入る。だから、そこで常に乗客同志でトラブルが越こるのである。

また悪いことに、彼らは甲の街乙の街へ行く時は必ず世帯道具と一緒に、折りたたみ式
簡易ベッド（寝袋に似たもの。インドの安ホテルに行くと、毛布やシーツはなくただ裸の
ベッドがあるのみ。だから、彼らが簡易ベッドを持ち歩く理由はわかる。）を持つのであ

デリー
シキ・シキ館 見取り図



デリーで目の保養

ニューデリー駅に降りるや否や、鮮かなサリーを着た女性が非常に目につく。フェロゼポールでは夜だったのでさして気にもとめなかったのだが、ここデリーで影の深いインド女性がサリーを風になびかせヘソを出しおしりを振りながら歩く姿はなまめかしく、回教圏で黒いチャドリに身を固めた女性ばかり見えてきた我々にとつて十分すぎるほどの目の保養になった。なんせ、街行くうら若き女性のへそを無料で拝見できるんだもん。

イスラム教とヒンズー教とでは女性の服装がこうも違うもんかと変なところで感心したりした。イスラム圏においては女性の地位はものすごく低く、女性は男性の従属物みたい

る。だから、自分の体ぐらいの荷物を持って汽車に乗り込むから非常に混雑するわけだ。我々も押し合いへし合いしやと席を確保することができた。この日は二等車に乗り、カプセルで会った日本人の友人達と一諸にここまで旅行していたので我々でコンパートメントを占有してしまった。貴重品を確認してカメラやラジオの入っているかばんを包みこむ様な形で寝た。

ギリシヤはアテネのユースホステルでごろごろしていた時、南廻りで来た日本人に会ったら、「フェロゼポール、デリー間の夜行列車に家族連れ（トーチャン、カーチャンそしてガキまで連れてきている）のスリが出現し、外人旅行者のうちでも、とりわけ、日本人がいつもねらわれるから注意しろよ。」と助言を受けた。

またロンドンで、南廻りで帰った友人の手紙を受けとったのだが、その手紙の中にも、フェロゼポール、デリー間で日本人がよくねらわれるから十分注意されたいとこまごまと言われていた。

汽車は動き出した。もし変な奴が現われたら、我々で血祭りにあげてやるぞと興奮したおももちだった。

我々の心がまえがよかったのか、ハプニングも起こることなく汽車はインドの首都デリーに無事到着した。

注（ここで盗難にあっている日本人は枚挙にいとまがないといわれている。とりわけ二等があぶない）

なものだ。だから、イスラム圏においては、ウーマンリブの嵐どこ吹く風といった按配だ。イスラム圏の女性のあの黒いチャドリは、宗教的なものだけでなく、ひよっとしたら、「ブス救済法」として役立つているのかも知れないな。ここにおいては、女性と話はずることはおろか、写真を撮ろうとするとスタコラ逃げてしまおうし、その土地の男にカメラをこわされる時すらある。

イスラム圏の中でも、アフガニスタン、パキスタンの女性の隠し度は最高をいっており顔全体も黒い袋みたいなものをかぶっており、目のところだけ、アミ目みたいなものになっているだけ。(北アフリカなら、覆面をしている。)

それ故、それらの女性が若いのやおばあちゃんやら美人やらその反対やらとんと解らぬ。全神経を集中し、インスピレーションで我々はいろいろな想像を試みた。旅行者にとつて、あのベールほどおもしろくないものはない。諸君、そう思いませんか？

女性ばかり観察していても仕方がないので、友人にもらった情報ならびに地図を参照しながら、ニューデリーの中心地コンノートプレイス周辺をくまなく歩き廻り部屋を捜したけど、どこも満員。歩いているインド人のオッサンにいろいろ安ホテルを聞いてみたけどダメ。どうしようもないなと思っていると、一人のオッサンが寄って来て、この近くに普通の家で部屋を借している処があるからそこへ行きなされと教えてくれた。

そこは民宿みたいなものだった。値段は安いかわりに汚なく、鳩が部屋の中を我がもの

顔でスイスイ飛んでいるし、アメリカ人の兄あにさんはヨガの体操とも踊りともつかぬことを真剣にやっている。

そのマダムが、「ベッドが今満員なので、悪いけど床で寝てくれない？」と言い、これもおもしろい経験だ、野宿は何回も経験あるけど、家の中で床に寝るのはおもしろい、何事も経験だということその日はそこに泊った。

そういう経験は一回ぐらいにして、翌日はちょっと高級なホテルに移った。我々はもう三週間ちかくシャワーらしいシャワーを浴びたことがなく、一発暖かいシャワーを体一杯に浴びたいというのが我々の気持だった。それで若干高級なホテルへと移ろうということになったのだ。

我々はそのホテルに入るや、マネジャーに、「シャワーは付いているかい？ 熱い湯かい？」と聞いたらそのマネジャーは得意げに、「イエース」とイエに力を入れて答えた。我々は安心してここに泊まる旨伝えた。

やっとシャワーを浴びれるぞ、やっほ、とばかりみんな気持がはずんでいた。まず、じゅんけん、一番のり、を決め、I君が意気揚々とタオルを肩にシャワー室へと向かった。しかし、すぐ戻って来て、「おい、水しか出ないぞ」というと全員が「エエッ」と奇声をはりあげ、急遽、マネジャーのおやじに文句を言いに行ったら、彼答えていわく、「確かに、シャワーは水しか出ません。しかし、私はシャワーから熱湯が出るなんてこと

は一言も申しておりませぬ。今、下男が必死で湯を沸しております故、もうしばらくお待ちを。」

我々一同、畜生ノやられたと思った。聞く時に、「シャワーから熱い湯が出るのか？」と念を押しときやあよかった。後悔先に立たず。

みんな、しらけた顔で、下男が運んで来る湯で体を拭いた。タオルが垢で黒くなり、その汚れを見て、はるばるイスタンプールから病氣一つもせず、やせた体にムチ打ってここまで来たなど、新たな感激が胸を打った。

そのあと、パリの安ホテルで、日本手拭いにヒモをくっつけて作ったインスタントふんどしをくりつけた。忘れもしない、時は一九七一年二月二十四日。水曜日。外からは街行く人の陽気なざわめきが耳に飛び込んで来た。

デリーよさらばノ

デリーから、タジマホールが存在する故にたくさんの人が集まるアグラへ行こうと思い、今日こそは学割を使ってやるぞとばかり、デリー駅のコンセッションオフィスへ行った。

先客がもう二・三人居た。一時間そこで待ち、のらりくらりと書類を作ってもらった。

我々はそれを持ち、駅の切符売り場の窓口に出した。切符売りのオッサンがその書類を見

るやつっぱね、「切符は売れない」ときたから、こっちも頭にきて、「これは、今、作ってもらったばかりの書類だ、どこが悪いのかはっきりと説明して下さい」と聞いても向こうはただ「売れない」の一点ばり。二十分ぐらい、すったもんだのあげく、パートナーの石川の堪忍袋の緒が切れ、続いてぼくも切れた。「畜生ノあほかノぶつとばすぞノ俺達はなあ空手、柔道を習っとんよ」とイギリス滞在中にマスターした「けんか英語」を後披露したけど、敵もさるもので、我々みたいな連中としよっちゅう会っているのか「おどし」は通用せず。

しばらく、両者の間は沈黙が支配していた。「オッチャン、もう一回聞くけど、どこが悪いの？」と聞くと、「これら二枚の（二枚一組）書類の番号が同じじゃなくちゃいけないのに、おまえたちの番号が違っているから売れない」とぶっきらぼうに言った。

それならそうと早く言ってくれりゃいいのに、ひよっとしたら今朝出勤前に夫婦ゲンカ一発やらかしてきたのかなと思いつつ、例のオフィスへ訂正に行った。

オフィスのじいさんは、濁った目を我々に向け無表情で、「別に悪い処無し、これでオツケーだ」と言う。こっちは、順序よくゆっくりとなぜ切符が買えなかったかという話を話したら、「それなら、ここの番号を合わしときゃいいんだ」と言いながら書きなおしてくれ、「オツケー」というサインとハンをおしてくれた。

汽車発車の時刻は刻々と迫って来ていた。これでめでたく切符が我が手中に収められる



インドの子供達と

であらうと思いつつ足を切符売場に運んだ。その書類を提出すると、例のオッサンは、キリツと我々の顔を見つめ、「新しく作り直してこなくちゃ切符は売れない」と言い放ったので石川とぼくは頭にきて「糞して寝ろ」と英語の汚ないスラングを投げつけ、駅長に直訴に行った。駅長はピンと張ったヒゲをなでながら「ブッキングオフィス（切符の予約をする処）へ行け。」と言った。時間はあと五分ぐらいしか残っていない。あわてて、そこへ行くと「コンセッションオフィスへ行け。」とすげない返事。どっかの国の役所みたいにたらい回しされた。

しかたなく、あきらめてアグラまでキセルを貫徹することに決めた。汽車は乗ると同時にホームをゆっくりと離れた。

十分ぐらい走った頃、悪いことは続いて

起こるものである。車掌メが検札に來やがった。切符を持っていないのがばれ、怒られるかなと思っただけ、車掌の顔には別に怒る気配は見られない。そして手で合図をして、「となりの一等車で精算しよう」と言う。ええい、ままよとばかり彼の後について行き一等車の空いている席にどっかと腰を落ちつけ、値段の交渉をした。彼はすごく数字に弱い男で、若干値段をごまかしてやったけど気がついていない。

その時、ぼくの頭にピカッと光るアイデアがすすめた。つまりこういうことだ。

今、すぐ二等車へひき返したところで、満員で坐るところは無いから、ここで、我々の周囲に座っている一見紳士風と雑談をやり時間を稼せぎやアグラまで坐って行ける勘定。まして、ここは一等車だ。乗っているお客も品がよかった。

……でなことで、無賃乗車は貫徹できなかったけど、アグラまで一等車で行けたことはツイていた。

貧乏旅行のコツは、「キセル乗車」のことは例が悪いけど、失敗したりピンチな情況に面した時、今までのことを考えずに、すぐこれから先のことを考えていくことだ。そして、失敗したことは教訓化していくということだ。

話はちょっと脱線したが、

汽車がアグラ駅に到着した。客引きの兄ちゃんがここにもたくさん来ている。ホテルを決めその夜は早く床についた。

翌朝、半日輪タクを借り切りタジ・マハールへ連れて行ってもらった。我々の足より細いオッチャンがゼイゼイ必死にペダルを漕いでくれるのである。気の毒に思った。

ムガル王朝の王シャジャハーンが愛する王妃ムムタズマハルの死を痛み国を亡ぼしてまで作った大理石の霊廟は青い空に向かって高く、自分の美しさを誇示する様にその存在を示していた。太陽の光が霊廟に反射しキラキラとまばゆいばかりだった。

タジ・マハールの建物内部の様子は、以前スペインのグラナダに毅然として存在してるアルハンブラ宮殿で見た幾何学模様と同じ。それもそのはず、アルハンブラ宮殿もここタジ・マハールも同じイスラム文化の落し子だ。当時のイスラム文化の拡がりには相当なものであつたろうことは簡単に想像できる。

一説によると、満月の夜のタジ・マハールは世界で最もロマンチックな場所であるらしい。そしてそのタジ・マハールが過去から現在ひいては未来までのインドの栄華の象徴とみるや、その霊廟の外に群っている乞食の群れは、そのまま過去から現在、未来への貧困の象徴と考える。

インドほど貧困の差がはなはだしい国も珍しいのじゃなからうか？アフガニスタン、ネパールなどのアジア諸国も確かに貧しい。しかし妙な言い方だが、平均して貧しいのだ。

それがことインドとなるや、金持階級は最高級乗用車を乗りまわし、週に何回か一流ホテルあるいはレストランでパーティーをやり、公の建物かと思まらうほど豪華な邸宅に

住み、何人もの召使いを雇っている。

しかし、しかしだ／＼通りという通りには、家を持たない乞食たちがたむろし、生気のない濁った目をつき出し、道行く人に、「バクシーシー（金をくれ）」と力の無い手をだらりと出すのである。彼らは道で生まれ、道で生活し、道で結婚し子供をそだてそして道で死んでいくのである。

彼らは何を考え何を楽しみに生きているのであろうか？インドの政治はどうなっているのか？これらの疑問をもやもやとした形で心に残したまま次の目的地ネパールへと向かった。